消化器・肝臓センター

NEW－す

NO. 52
2019.10

肝がん分子標的薬治療の看護について

肝細胞がんについて

肝臓の細胞が、がん化して悪性腫瘍になったものを肝細胞がんと言います。肝細胞がんの治療は、肝切除・ラジオ波焼却療法・肝動脈化学塞栓療法が主な治療法となります。肝細胞がんは高頻度に再発を繰り返し、最終的には進行肝細胞がんに進展することが多く、進行した肝細胞がんに対しては、分子標的薬による薬物療法が適応となります。

分子標的薬による治療

当院では、この分子標的薬による薬物療法が行われています。この薬は飲み薬であり、通院で治療を継続することができますが、患者さん自身で体調を管理していただく必要があります。導入時には入院していただき、副作用の観察を行うとともに、日常生活で心掛ける事・注意等の指導を行っています。副作用の出現には個人差がありますが、服用開始1週間前後に現れることもあり、減量や休薬する事例は少なくありません。私達は副作用の予防、早期発見、適切な対応をすることで、休薬することなく内服治療を続けられるように関わっています。

分子標的薬の副作用

発現頻度が高い副作用として手足症候群があります。発現のピークは1～2週間です。服用開始から2か月程度は特に注意が必要ですが、それ以降も皮膚の変化には注意が必要になります。手足症候群の多くは、普段から圧力や摩擦のかかるところ、角質が厚くなっているところに現れやすいと言われています。この手足症候群に関しては、患者さん自身の自己管理で多くの場合は対処可能です。服用開始前に、手足の皮膚の状態を観察させていただき、治療開始前から予防を行っています。そして、皮膚の状態に合ったケアの方法を説明し、手足症候群の予防、重症化を防げるようにアドバイスをさせていただいています。当初は、手足症候群に難渋し中止例も多く見られましたが、看護師・薬剤師も含めた多職種が連携しマネジメントすることで中止になる症例は少なくなってきています。

他の副作用として、高血圧・食欲低下・体重減少・下痢・倦怠感等があります。患者さんには、こちらからお声掛けすると共に、パンフレット等で疾患や治療の知識を持って頂く様に努めています。体調の変化があったり、治療内容に質問がある時は遠慮なく声を掛けて下さい。

4階南病棟　看護師
主任　森野 奈穂子

市立貝塚病院
TEL：072－422－5865

KAIZUKA